

余生を反戦・平和活動に

——機一艦総当りだ！——

朝日ヶ丘町 白石 昇

……平成十五年八月十五日は五十八回目の終戦記念日。昭和から平成に移っても、戦前・戦中派にとつて、この日は格別の思いがある。予科練（海軍飛行予科練習生）から飛練（海軍飛行術練習生）へ進み、実戦部隊配属寸前に終戦を迎えた白石昇・元別府市議（七十七） 〓 別府市朝日ヶ丘町 〓 の戦争体験を紹介する……

※ ※ ※ ※ ※ ※

白石さんは昭和五十四年から平成十一年まで、市議を五期二十年務め、余力を残して引退。その後は一市民として、反戦・平和の活動を続けている。

その白石さんは佐伯市で生まれ、育った。昭和十六年十二月八日の開戦は、旧制佐伯中学二年生のとき。十五歳だった。「真珠湾攻撃の大本営発表に飛び上がって喜び、教室では大騒ぎして授業どころではなかったですよ」。

同十八年、四年生のとき、予科練を志願して合格。ガダル



白石 昇さん

〔写真「今日新聞」〕

台湾の虎尾海軍航空隊で。後列中央が白石昇二等飛行兵曹



カナル撤退、サイパン玉砕、山本五十六元帥戦死と戦局は日増しに不利に傾いていた。

「家業は海運業。私も高等商船学校へ行くつもりでした。

しかし、学校では担任教師が『一機一艦総当りすれば、この退勢は挽回できる』と声を高くして言い、成績一番の親友も予科練に行くといふので、俺も行くか、と。ただ、父親には無断で志願したので、合格したときは怒られました。私が長男だったせいもあるでしょ」

同年十月一日付で第十三期前期予科練に入隊して、鹿児島海軍航空隊へ、翌十九年七月二十五日、予科練を卒業。同日付で第三十九期飛行術（操縦専修）練習生として、台湾の虎尾（こび）海軍航空隊に入隊を命じられた。総員二六〇人の「期長」として台湾へゆく。そこで連日、厳しい訓練に明け暮れたという。

「『アメとムチ』という言葉がありますが、飛練の生活は教官によるムチばかり。檜の木の棒やバットがムチ。よく叩かれました。それよりも辛かったのは、罰としての『飛行場一周、駆け足！』でした。暑い台湾ですから、それはこたえませんでしたよ」。

その台湾も米軍が制空権を握り、虎尾航空隊も激しい空襲を受けるようになり、二十年二月、福島県の郡山海軍航空隊に転属。「郡山の化学工場には女学生の勤労隊が動員され、アメリカB29の大編隊が飛んできましたが、当時の私は『日本は負ける』と思ったことはなかった。軍人精神をかなり注入されていたんでしょ」

郡山市で二十年八月十五日の終戦を迎えた。

「みんな整列して玉音放送を聴いたが、意味は分からなかった。分隊長が『日本は負けたんだ』と告げた。これで故郷に帰れると、ホッとしたのが正直な気持ちでした。負けて悔しいという思いはなかった。九州に帰る列車が、広島駅に短時間停車したときの光景は、今も忘れることが出来ません。まさに焼野が原。新型爆弾という言葉を知ったのは、ずっと後のことです」

「日本の現状は、あの関東軍が満州国を建国したときにそっくり。アメリカに従属して、主権はないに等しい。戦争体験を次世代に語り継ぎ、一人独りが戦争と平和の問題を自分たち自身の問題として考えることが大切だと思います。私も元気なうちは活動を続けていきます」と話した。

父の証言

「朝日新聞」記事提供

人間を鬼にした日本の軍

新聞記者 ○○○子

敗戦の年の大みそか（三十日、晦日）中国大陸から、疎開先の家族のもとに帰って来た父が最初に語ったのは、日本軍が中国の人々にどんな残虐なことをしたか、ということだった。

八十八人切りの願をかけ、中国人を殺すたびに肝臓の一部を干して軍靴に詰め込んでいた上官の話、麦畑で働いていた若者二人をスパイだとかまえ「桶を持ってこい、白状しないとその中に首を切り落とすぞ」と脅迫、拷問して殺したという同僚兵士の話。地下壕に隠れた数百人の村民を水責めで殺した別の部隊の話……。

小学生だった私に、あの戦争が残忍非道な侵略戦争であったことを悟らされた。父は「どんなに詫びても、わび足りない。償うためには二度と戦争させないことだ」と、平和運動を八十四歳の今も続ける。

父の戦争体験からもう一つ思い知らされたことは日本の軍隊内部の非人間性、野蛮さであった。牧師である父は「殺すなかれ」教えを守ろうと食事を減らして栄養失調になり、運よく宣撫（せんぶ）班に配属され、周囲の中国人と親しくなった。それが、「反戦的」と疑われ、殴られて半殺しの目にあつたという。

加害者にされた兵

実は日本の軍隊の恐ろしさは、私自身日々体験していた。疎開先の教会の会堂が軍に接収され、二十数人の兵士が駐屯していたが、大の男がビンタを張られ、スリッパで殴られ、軍靴でけられる光景を見ては恐怖と嫌悪感に震えた。

「軍隊は人間を鬼にする」と父はいうが、それは中国人が

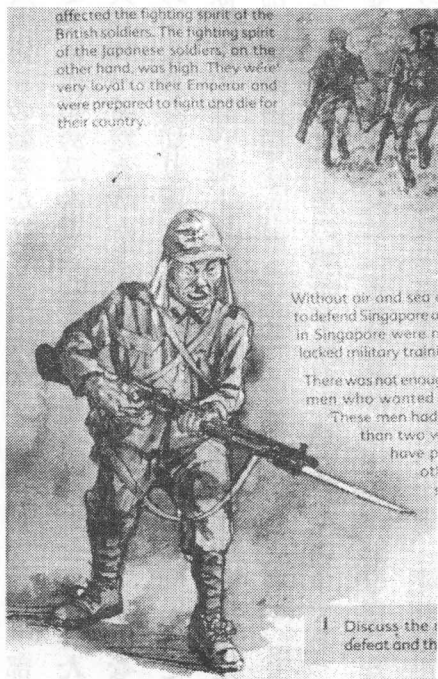
「日本鬼子」と呼んだように侵略先の人々に対してだけでなく、自治の名の下には軍内部の人間に対してもそうだったのだ。上官の命令は大元帥・天皇陛下の命令だと絶対服従の徹底した上下関係の社会で、人間が人間であることを否定されて、殺し尽くし・焼き尽くし・奪い尽くす「三光作戦」（こう呼ばれて中国人に恐れられた）の加害者にされた。

それは軍だけでなく、社会全体に当てはまり、戦争に疑問を持つ、つまり人間であろうとすれば、「非国民」と迫害された。疎開生活で何よりつらかったのは、空腹よりも、クリスチャン一家ということで「鬼畜米英のスパイ」と落書きされたり、差別、いじめを受けたことだ。家によく来ていた見知らぬ男性は、監視のための特高警察だったと、戦後、母から知らされた。

再軍備におびえる

八月十五日「戦争が終わった！」と妹たちと抱き合って喜んだのは愛国少女でなかったからだろうか。敗戦に悔み泣きした人もいると聞いて不思議に思ったものだ。戦争で死ぬ人がいなくなるのになぜ、と。そして数カ月後に父から聞いた加害の証言。子ども心に反戦平和思想を刻み込まれて戦後を歩み始めた。

焼け野原の東京にもどり、高校へ進学したが、重い結核に倒れ四年近い闘病生活を強いられた。病床で、再軍備の



軍は中国での日本兵の残虐行為を知らせまいと「検閲」した。上海黄浦江の河口に近い月浦鎮で捕虜にした中国兵に銃を突き付ける日本兵の写真は、「対外的不利」を理由に発表「不許可」に
 =毎日新聞社提供

シンガポール：小学校での『歴史教科書』の中より
 (朝日新聞提供)

足音におびえ、熱が上がるほどだった。二十歳のとき朝日新聞の声欄に初めて載った私の投書は「海外派兵に反対する」(一九五四年六月五日付)という一文であった。朝日新聞記者になる、だいぶ前のことだ。最近の自民党内閣の外交姿勢はあまりにもアメリカ追従のように思えてならない。

「朝日新聞」掲載の投書

一八十年八月十日付「声」欄、以下掲載

第二次大戦中、ビルマ(ミヤンマー)戦線を転進中に、互いに助け合った仲間たちだけで戦友会をつくっています。毎年五月に三十人ほどが集まっています。その宴席でとくに決めたわけでもないのに、だれ一人軍歌を歌おうとはしません。

泥沼の密林で高熱のため力尽きて息絶えた者。極度の飢えのため、自らの命を絶った者。一度も手当てされない傷にウジが群がる狂気。

生き地獄を知っている私たちは、勇壮や悲壮さをことさらに強調した軍歌など、空しくて歌えないのです。

いま、若者たちを扇動して戦場に追いやる、あのいまわしい軍歌の気配を感じています。この歌は、若者たちに決して歌わせたくないものです。私たちは二度とそれを口にしないと、遙かなビルマに眠る霊に心の中で誓っているのです。

(要旨)

黙して歌った非戦の思いを

弘前市 医師 九十歳

「軍歌の中にも、非戦にじむ歌」について私の思いを申し上げます。

おそらく、この歌は日露戦争当時に作られた「戦友」だと思います。「ここは御国を何百里、離れて遠き満州の」で始まります。

歌詞には反戦の語はみじんもないが、戦争の悲惨さがしみじみと表現されていました。私は今でも長い歌詞を暗唱できます。

私は先の戦争に招集され、五年間、中国東北部（旧満州）に従軍しました。色々な軍歌がありますが、私の中では子供の頃から馴染んでいた「戦友」だけが反芻^{はんそう}され、声には出さずに歌っていました。時の総理の東条英機が「戦友」は軍紀をないがしろにしたものという理由で、歌うことを禁じていたからです（註：昭和二十年三月末陸軍省通達による）。東条の言う軍紀をないがしろにしたという部分は、敵弾に倒れた戦友を

「我はおもわず駆け寄って

軍律きびしい中なれど

これが見捨てて置かりようか

『しつかりせよ』と抱き起し

仮纏帯も弾丸の中

と思われまます。私は人間の心情をこれほど熱く歌いあげた軍歌は、世界に誇るべきものだと思います。

今も胸に響く亡き母の歌声

東京都 会社員 五十五歳

軍歌「戦友」は、十四番まである長い歌です。

亡き母は、歌が好きでした。戦争中、食糧事情の悪化の中で二歳で病死した長男には、軍歌をよく歌ってあげたそうです。でも思い返せば、母は戦後生まれの私には「戦友」以外の軍歌を決して歌おうとはしませんでした。歌の内容を話して聞かされたとき、子供心に何て悲しい歌なんだろうと思いました。

その歌詞の中で主人公は倒れた戦友は抱き起こすと、友は

「お国の為だかまわずに、
後^{おく}れてくれな」と目に涙

多くの兵士が、国策と人間性との葛藤^{かつとう}の中で倒れていったことでしょうか。

七十年ごろ、ベトナム反戦運動が盛り上がった当時、友人と「この歌は当時としては、精一杯の反戦歌ではないか」と話し合ったことがあります。

でも、私はこの歌は戦争を美化しているとあえて言いません。この歌の最後に主人公は、友の最後を内地の遺族に書き送ります。国は戦友の死、家族の犠牲を真摯しんしに悼む感情をも巻き込んで、国民を殺戮さつりくに動員していったのも事実だと思えます。

教え子、戦場に送った償いを

船橋市 無職 八十五歳

私は戦争中、天皇の国が負けるはずがないと信じていた青年教師でした。

尋常高等小学校の高等科の生徒を連れて手不足の出征農家の田畑を耕し、桑の皮むきや松根油集めをしました。男子生徒には軍隊に志願させ、満蒙開拓青少年義勇軍に勧め、女子には従軍看護婦を勧めました。その結果、生徒が登校しなくなったり、家庭訪問すると「人さらい先生」とまで言われたりしました。

母に泣いて止められたため実現しなかったが、宣撫班とし

て南方に征つていたら、それこそ戦争犯罪人として処罰されただでしょう。

それだけに今、新聞やテレビを見て不安なことばかりです。最新鋭の武器で武装している自衛隊だから安心とか、後方地域だから安心とか、北朝鮮は拉致の国だからやつつけろ、とか。

私は片目が見えず耳も遠く、足腰は弱くなり、障害者二級です。それでも反戦と平和を訴えるピラを電動車椅子で一時間もかけて配っており、これからも続けたいと思います。有事法制に反対の立場で、新しい世の中をつくる運動に参加して、若い頃の罪を償いたい気持ちでいっぱいです。

別府と占領軍

朝日新聞「大分版」平成七年

（五十一年の物語）第五話

温泉都市・別府は、空襲こそ受けなかったものの、強制疎開で家並みが壊され、戦前の観光地の面影はなかった。街角を歩き交う米兵に、赤い口紅の女たちが群がった。背の高いアメリカ兵にぶらさがるようにして手を組んでいた。

一九四六年三月、大分県内の建設会社約二十社が進駐軍に呼ばれた。兵舎、家族住宅、将校クラブなど、総事業費

六億五千万円のキャンプ建設工事。別府を生き返らせるカンフル剤となった、と佐賀忠男著「別府と占領軍」に詳しく記述している。

工事の中心となったのが「星野組」だった。本社は東京にあったが、別府に支社を置き、社長の実弟の岡本忠夫が仕切っていた。大分県弥生町生まれ。トンネル専門の土木屋だった。

キャンプ工事でひと山当てた岡本は、四六年秋「野球チーム」の結成を思い立つ。――

支度金一万円、月給は総理大臣と同じ三千元。各地の社人チームから、優秀な選手を引き抜いた。試合では、賞金を出してハツパをかけた。ヒット一本千円、本塁打なら一万円。めったに手に入らない米国製たばこ「ラッキーストライク」もふるまった。

「典型的な成り金で、金の次に欲しかったのが名誉。それが星野組」と、長女の重子は言う。

チーム結成時、四十六歳。丸眼鏡にチョビひげの、ずんぐりした体形。ヤミ市で手に入れた仕立てのいい服を着ていた。当時珍しかった自家用の自動車を持ち回し、試合で活躍した選手を乗せて帰ることもあった。旅館（日名子旅館）も経営しており、チームの合宿所にした。

別府市の重子の自宅に、父親の足音をしのぶ記録は何も

残っていない。「家庭を顧みない人でしたから。私とも反りが合わなくてねえ」

それでも、と重子はつけ加えた。「いま思えば、暗い時代に多くの人に夢を与えたい、という気持ちもあったのかも知れませんか」

晩年の岡本は、旅館の会長職の傍ら、大分県体育協会名誉会長、人権擁護委員会の会長などを勤め、一九八〇年一昭和五十五年十一月五日、八十歳で亡くなった。ちょうど旅館の給料日。自分の給料袋の中身を確かめた後の、おだやかな最期だった。

|| 敬称略 ||

すき焼きと天ぷらの正体

仙台市 会社役員 六十一歳

終戦前後の横浜の学生寮は、遠く故郷を離れているせいもあり、飢えとの闘いがすさまじかった。「特攻隊」を編成して真夜中に農家の畑に忍ぶ、盗賊の群れにさえなりさがっていた。

猫狩り専門の二人組みがいた。彼らの招待で久しぶりのすき焼きを満喫したが、その肉が猫であると知らされたときただガク然、後悔すること数日。彼らが通ると猫という猫は

屋根や木に駆け登り、しつぽを逆立てうなり続ける。気のせいか、彼らの目つきが動物的にあやしく輝く。どんな暗がりでも困らないと聞いた。彼らは今はそれぞれの会社で重職を担っている由。

卒業はしたものの新京からの仕送りが絶え、居候を続けるM氏の場合。体力の消耗を防ぐと称し、終日布団の中で読書さんまい。

彼が何やらカリカリ口ごもっているところへ訪ねた私に、「おいしいから」と差し出した中指大の揚げたての食べ物。まるで小魚のような歯ざわりと時折ヌルリとする舌ざわりを覚えた。彼が原料の容器を開けたとたん、ウジャウジャはい出してきたのは青虫である。私は絶句した。彼はその数匹を小麦粉の溶液へ放つて無心にかきまぜていた。同窓名簿の彼の欄は勤務先も住所も空白なのが気がかりである。

マーシャル元帥と私

山口市 無職 七十二歳

昭和二十一年春、奉天―開原間の軍用列車の車掌として乗務したとき、国府軍と中共軍の内戦を調停するための現地視察団が乗り込んできた。アメリカのマーシャル元帥、中共の

林彪^{りんひょう}、国府の張群の三將軍であつた。奉天駅を発車して間もなく、マーシャル元帥に呼ばれた。

ソ連軍参戦で北滿から引き揚げた開拓団のその後の生活状況を聞かれた。開拓団の悲惨な状況をよくご存知なのに驚いた。

元帥はさらに「在満日本人がいま一番望んでいることは何か」とも聞かれた。そのころ在留日本人が最も心配していたのは、旧日本貨幣が通用しなくなることであつた。手持ちの貨幣が無価値になれば日本人の生活は根底から破壊される。「旧日本貨幣の通用が日本人最大の願ひである」と申し上げたところ、元帥は「よく承知している」と言われた。欧州復興のマーシャルプランで知られ、軍人としてノーベル平和賞を受賞された元帥の温容が脳裏から消えない。

新妻を残して補充兵の最期

宮古市 会社役員 六十五歳

昭和二十年五月一日、豹兵^{ひょうへい}団歩兵第四一連隊第三大隊はミンダナオ島アグサン川上流へ第一次転進を開始した。途中六月二十日の戦闘でわが第九中隊では私と〇〇〇一等兵が負傷、転進先の陣地に收容された。

私の負傷は左下肢軟部貫銃創で約一カ月後に治癒したが、彼は複雑骨折を伴った右下肢貫通銃創であった。負傷箇所は無数の骨片が内在しているため化のうが激しく、ついにリング大の洞穴になった。

彼は戦局が好転すれば新妻の待つ故郷へ帰れると、苦痛に耐えていた。聞けば結婚一週間後に赤紙が来た補充兵であった。八月三日、第二次転進命令。「転進部隊は自力歩行可能者のみをもって編成せよ。歩行不能者すなわち担架搬送、介添えを必要とする者には自決を慫慂（しようよう）すべし」。この命令を伝えられた彼は「何とも仕方がない。このような状況で死を選ばねばならぬとは、まことに無念だ。あなた方が幸い日本に帰られたら、私の最期の様子を妻に知らせて下さい」と小銃の銃口をくわえて目をつぶった。轟音一発！弾丸は頭部を貫通し、ここに前途有為の青年が万斛（ばんこく）の恨みを抱いて不帰の客となったのである。

同月十六日以降、米軍は攻撃してこなくなった。九月七日兵団司令部の命令で降伏した。終戦へ二週間足らずの差で、死ななくてもよい人が死んでしまった。手帳を捕虜收容所長の命令で焼却させられ、ご遺族への報告不能のまま現在に至っております。

「あした死ぬんだ」

埼玉県 主婦 四十七歳

鹿島神宮前通りに面した私の家の前がある日、ザックザックと靴音をたてて大勢の兵隊さんが通り過ぎて行きました。こぶしを高く振りかざし「あした死ぬんだ」と叫んだのをはつきり覚えています。

幼い私はその光景の意味がわからず、そばの人に「あの人たちどうしたの」と聞くと「飛行機ごとアメリカの船にぶつかるんだって」と涙声で教えてくれました。特攻隊の最後の鹿島神宮（鹿島市）茨城県参拝でした。

年齢は十七、八歳の少年たちだったそうです。何と云ってよいか、胸のふさがる思いをしました。あの時の兵隊さんと同じ年ごろの高三の息子を見るたびに、いま私たちが知らない所で別の新しい戦前の道を歩いているのではないか、ときえ思わずにはいられません。

肉親の話から身近さを実感

佐伯市 高校教員 三十八歳

数年前に病死した私の祖父は一兵卒として第2次世界大戦で戦った。

小学生の頃に夏休みの宿題で「聞き取り」調査をしたが、こちらの調査姿勢もいい加減だったし、祖父もあまり多くは語ってくれなかった気がする。そういうわけで、詳しいことはよく思い出せないが、もし、この祖父が早くに戦死していたなら、私の父は誕生しておらず、当然、私もこの世に生を受けてこなかったということになる。

「戦争」を知らない私のような世代にとって、「戦争」を経験した肉親の話は非現実的な「戦争」を身近に感じさせてくれる。自身の存在にかかわる問題であることをはつきりと示してくれる。「戦争」というものを語り継ぐポイントは、こういう所にあるのではなからうか。

私の勤務する学校では8月6日の登校日に「佐伯の町にもあった空襲」という講演を聴いて平和授業をした。

「この空襲で、もしも自分の肉親が亡くなっていたら？」

生命の連鎖を簡単に引きちぎる「戦争」のむごさを、今一度再確認する機会となることを願ってやまない。

住民の対応が以後の支えに

大分市 無職 八十三歳

昭和十九年五月、第二次大戦もわが軍の敗色の濃さを思う頃、私は中支鉄道輸送勤務についていた。伍長の私は兵四名と共に小駅を受け持つことに。だが、駅舎は破壊されていて、近くの農民の一室を強引に宿舎とした。

制空権は敵が持ち、輸送は夜間のみだった。治安は表面は良いようだが、家主ら住民の目は冷たく、護衛手段を持たぬ我が身をいかに守るかが一番心配だった。私は住人らと仲良くする以外にないと思い、このことを強く部下に命じた。

最初は懐疑的だった家主一家や付近住民も次第に心を開いてきて、時には笑顔を見せるまでになった。そして一度はゲリラの攻撃から私らを助けてくれたこともあった。年末に勤務が終わり、帰隊するときにはお別れ会を開いてくれた。「いい人たちだった」と別れを惜しんでくれた。

護身の手段とした誠意の行動を、住民たちは正面から受け止めてくれた。私はこのことを忘れない。以後の人生の柱とした。

(上記とこの分『大分合同新聞』より)

結婚を前にして

白杵市 主婦 八十歳

平成十五年八月十四日「大分合同新聞」転載

昭和十八年十月、当時の戦争の様子は、日本には不利な状況であったのに、軍部は真相を知らせないので、私たちは不安を感じていなかった。

長崎の出張所に勤めていた彼と間もなく挙式ということになっていった。自分も仕事を持っていたので会いに行くこともなく、ただひたすらその日を待っていた頃、彼に突然召集令状が来た。互いに「元気でね」と言つて急きょ出発していった。モクセイの花が満開の朝だった。

数ヶ月が過ぎ「当地は今、桃の花盛りです」と書いたはがきが最初で最後だった。その後、北支で戦死とのこと。日ごとに戦況は悪化、泣いている暇などなかった。絶え間ない空襲、広島と長崎の原爆、特に長崎については、あの地で暮らすことになっていった私だけに忘れられない。

一枚の令状で召され、つぼみのまま散つた彼、反対に命を得た私。複雑な気持ちだ。数多くの尊い命のお陰で今の平和はある。全くその通りだ。でも、人の命を犠牲にせずに、平和をもたらしことはできなかったのか。日本は戦争を回避することに努力したのか。六十年が過ぎた今日、思いを新たにしている。

「無関心はびこるのが怖い」

「わたしたちの世代は『戦争』という言葉には敏感です。悲惨さを知っていますから」

結婚から一年足らずで夫が戦死。終戦を旧満州（中国東北部）で迎え、娘と二人、何とか白杵に引き揚げてきた佐々木ラクさんⅡ大分市明礪Ⅱは語る。

イラク戦争。ごう音をたてて飛び立つ戦闘機。対空砲火のまばゆい閃光。映像で見るイラク戦争は、一九九一年の湾岸戦争同様、まるで映画の世界。日本にいと、「頭上を銃弾が飛び交い、絶えず死を身近に感じていた」という佐々木さんの体験した戦争とは異質なものに映る。

「今は武器を使って打ち合うテレビゲームも一杯あるでしょ。最近の犯罪や自殺の多さを見ると、若い人の中に命の重さを分かっていない人もいるみたい。この先も平和な日本を守っていけるのか心配」と不安を語る。

「小泉さんになって外交もずいぶん変わったな」と赤嶺幸一さんⅡ緒方町上自在Ⅱは感じている。

終戦時は広島県にあった江田島海軍兵学校の二号生徒（二年生）。広島に原爆が投下された時は、近くの呉市で訓練中だった。胸を締め付けられるような大音響と、見たこともな

いドーナツのような形の雲を今もはつきり覚えていた。

「みんなの意識から『敗戦国だから』という意識が消えてきたのだろう。自衛隊が海外に出るのは誤った道ではないと思うし、イラクの人道支援のために自衛隊を派遣するのも理解できる。しかし、どうみてもイラクはまだ戦争状態」と、自衛隊を派遣する時期に疑問を感じている。

佐伯市平和記念館「やわらぎ」の基地があった佐伯市鶴谷町に、九七年建てられた市平和記念館「やわらぎ」。戦時中の街並みや基地の写真、兵士の遺品や手紙などを展示し、訪れる人に「平和」を問い掛けている。ここでボランティアガイドとして、戦争を語り継ぐ桧垣七郎さん。同市下久部は「真つ正面から平和を考えた安保世代の学生」と今の若者を比べる。

「良い悪いは別にして、昔の若者は国のことを思う気概があった。今の若者の多くは自分のことばかりで、平和には無関心に見える。昔のように国民に無気力感がはびこると、歯止めが利かなくなる。本当はそれが一番怖いことなんです」と危惧する。

〓 終わり 〓



佐伯市平和記念館やわらぎでガイドをする桧垣七郎さん（中央）
（大分合同新聞社）